

浅野誠旅シリーズ2

台湾(2009年) ・バリ(2012年)

2013年9月制作

はじめに

旅シリーズでは、しばし前に作成した「沖縄各地2007-2010」につぐものだ。

ここ15年ほど、1年にだいたい1回ぐらい海外に出かけている。最近では、この他に、フィンランド(2010年と2011年)に出かけた。

でも、年齢相応に、だんだんおっくうになり、少しずつ減ってきている。なにか、強い誘いがないと動けなくなってきている。いまでも、友人のいるアイルランドやアメリカなどに、いつか行きたいとは思っている。また、大陸中国、韓国、ベトナムなどにはいきたい、と思う。

さて、今回は、台湾とバリの旅の紹介だ。フィンランドについては滞在期間が長いことや、いろいろと文章を書いていることが多いので、シリーズ3として別途編集する予定だ。

目次

台湾 4

台湾旅行計画 近隣からのお誘い

沖縄からスタート

台湾到着

迪化街

迪化街のお店

さとうきび絞り器具を見る一行たち

超大型の会員制問屋スーパー

保安宮

孔子廟

忠烈祠 衛兵交代式

台湾ビールと昼食

総統府など

足裏マッサージ

MR Tにのって士林夜市へ

市場 大根餅 など

小学校 テンポがよく元気がいい台湾の人々

ラーメン 蛙料理 サトウキビジュースづくり

清水仁編著『国立故宮博物院案内』を読む 中国歴代皇帝の宝物

バリ

17

友人訪問を兼ねたバリ短期旅行から帰る

バロン

旅スタイル

ゴアガジャ遺跡

バリの人々 お店での買い物

キンタマーニ高原と棚田

暮らし・自然・宗教と結びついた文化

ネカ美術館

自然と暮らし

ウブド王宮と踊り

社会風景 宗教 市場 お金

友人たちのアートセンター「イエロー・ココ」

ステキな「レストラン」？

道路を通る村の行事

タマンアユタン寺院

ビール「ビントアン」 日本料理

タナロット寺院

スパとエステの体験

買物 上着 ザブトンカバー Tシャツ サンダル 木彫りの魔女ランダ 鳥笛 石鹸など

台湾 2009年

台湾旅行計画 近隣からのお誘い

(2009年2月21日)

先日の記事で、近隣からのお誘いがいろいろあると書いたが、その一つは、台湾旅行計画だ。玉城の近隣の方、およびその縁故の方々と、台湾の知人の案内もあつての2泊3日の計画。東京往復より安い価格だ。さすがすぐ近くの台湾だ。

現地の知人の案内ということで、市場、種物店、金物店、などローカル色というか、農業関係者の旅行らしいものでもある。私にとっての「海外旅行」は3年ぶりとなる。

そして画期的なことは、今回は自分で計画した個人旅行ではなく、生まれてはじめての団体海外旅行なのだ。だから、すべてお任せだ。ということもあつて、日程が近づいた今日でも、ガイドブックもなにも見ずに、「引率者」お任せだ。たまにはこんな旅もいいかもしれないと思っている。

いっしょに旅をする人も、相互に知り合いばかりのようで、私だけがちょっと「新米」の感じか。私が平均年齢を少し押し上げるのかな。でも、同世代に近い方々との旅というのも、私にとっての初体験である。

台湾に行くのも初体験、ということも含めて、何事も初体験は楽しみである。近隣には、台湾生まれの方もおられる。沖縄と台湾は、なにかと関係が深い。その方から、幼少時代の台湾の話聞くこのごろである。



上の写真は、飛行機から写した島尻一帯だ

沖縄からスタート

(2009年2月27日)



チャイナエアラインにて出発。久しぶりの「海外旅行」。はじめての団体旅行で、「お任せ」。いつも感じる緊張と興奮はなし。でも、はじめての台湾旅行。それなりの興味はあり。飛行機から、台湾の山々が見える。

台湾到着

台北のホテルにつくと、今回の旅行のリーダーの縁戚関係の方のお迎え。この家族関係者にすっかりお世話していただいた。早速、果物をいただいて試食。

レンブ（左側）となつめ（右側）

レンブは沖縄にもあるが、それよりもずっと大きくて甘い



迪化街

さっそく、いろいろなお店、とくに漢方薬や薬膳になる食材などを売る店が並ぶ通りへ行く。

そのなかに、人々の信頼が厚い廟がある。恋の成就を祈念するのか若者たち、カップルたちも多い。





迪化街のお店

今回の一行は、農業関係者がほとんど。ということで、農業関係のお店に行く。

沖縄と気候が似ていて、共通の作物もあるが、微妙に違う。

たとえば、ゴーヤには、私がかってトロントのチャイナタウンで出会った、イボがなめらかなものがある。

右の写真は、プーアール茶、バラ茶、果物茶などを含めて、薬膳的な食材が並ぶ店。

私もいくつか買った。



さとうきび絞り器具を見る一行たち

さとうきびを絞ってジュースにする器具に関心が集まる。沖縄製品よりも台湾製品のほうが実用的だとのこと。

道路には、車だけでなく、バイクが一杯。すごい混み方だが、そのなかをぐんぐんと進む。事故がおきないかと気になるが、ともかく元気よく町は動く。

久々に排気ガスを浴びて、玉城にもどってから、久々に鼻うがいをする。



超大型の会員制問屋スーパー

高い天井まで、商品が積まれている。卸製品の販売なので、大量購入が前提となる。値段は、当然のことながら、安い。ただし、日本製品はそれほどでもない。アメリカ系の店。沖縄にあるサンエーとかジャスコのような店は見当たらなかった。

商店街や市場が元気よく動いている。ただ、コンビニが超たくさん。ファミリーマートが、「全家」という名前で、あちこちにある。



左の写真は食糧品の売り場。超大きい冷蔵庫が並ぶ

夕食は、このスーパーのなかのモールで食べる。

でてきたピザが超でかい。これで4人分くらいか。でも、4人では食べきれない。値段は、1000円もしない。

今は、1元=3.3円ぐらい。



保安宮

翌日、この日だけは、旅行社のツアー
 によって、台北観光

最初に訪れたのは、人々の信仰あつい
 保安宮



入り口近くの掲示板に、歴史講座の
 案内が張ってあった。(下写真)

そのなかの1コマに、日本の東洋大
 学の先生の講座も含まれていた。



2009 台灣文化與歷史系列講座

時間：毎月一次・週六下午 2:30~4:30
 地點：保安宮後棟一樓雲表廳
 主辦：財團法人台北保安宮
 承辦：財團法人保生文教基金會
 策劃：慈濟大學宗教所林美容教授
 洽詢：(02)2595-1676 轉圖書館

月份	日期	講 師	講 題
3月	3/21	莊永明教授	台灣人的生活記憶
4月	4/18	保安宮文化祭宗教信仰講座(此講座須報名參加)	
5月	5/16	鄧湘揚老師(文史工作者)	風中緋櫻—霧社事件
6月	6/20	林淇濂教授(向陽) (國立台北教育大學台灣文化研究所)	日治時期台灣小說與社會
7月	7/18	李能棋老師(李喬) (寒夜三部曲作者)	台灣歷史公案詮釋
8月	8/15	陳錦華教授 (國立台灣大學文化與自然資源學系)	台灣文化的歷史形構： 熔爐、馬賽克與混雜
9月	9/19	林茂賢教授 (國立台中教育大學台灣語文學系)	台灣民俗漫談
10月	10/17	林會承教授 (國立台灣藝術大學建築與古蹟保存研究所)	台灣建築的歷史發展
11月	11/21	植野弘子教授 (東洋大學)	日治時期的高等女子學校教育 與其影響—從生命史觀察 「日本」經驗和生活方式

※ 以上活動如有變動，以本宮轉新公告為準。

孔子廟

沖縄にも孔子廟があるが、今は本格的なものではない。本格的な廟を見るのははじめて。

団体ツアーなので、一カ所に立ちよる時間は短く、10分あまり。

じっくり見たいところであったので、最後になってしまい、呼びにこられてしまった。



この次に行った故宮は、一日以上かけて見るようなところだが、大変な雑踏状態のなか、1時間もない短時間の見学となる。ここは写真撮影禁止なので、写真はない。それにしても、雑踏とすごいスピードなので、写真撮影さえ困難という感じでもある。

さぁっと見てまわるには好都合だが、私のように博物館が好きなものにとっては困る。

現地旅行社設定標準コースは、こうした権威の象徴のような場所と、リベートのはいる土産物店ということのようだ。

故宮では、歴代王朝の宝物ばかりにみせられた。人々の暮らしはまったくみえない。

忠烈祠 衛兵交代式

ガイドツアーはこういうのを見せるのがお決まりのようだ。

でも、政権交代によって、交代式がおおげさになったり、小ぶりになったりがあるという説明はおもしろい。

その前にみた故宮を急いでまわったのは、この儀式に間に合わせるためだった。



ロンドンあたりの交代式が、貴族的雰囲気
が強いが、ここでは軍事色が強い。

台湾ビールと昼食

台湾ビール。安価だ。200円ほど



料理は、とてもあっさりしていて、
沖縄料理に似ている。塩分が少ない。

激辛の台湾ラーメンのイメージがあ
ったが、まったく異なる。油分は、沖
縄料理よりも少ない。

なかなかおいしい。

総統府＝旧総督府

総統府など

ツアーは、この後、総統府前を通
って、台湾民主記念堂へ。総統府は、
かつての日本総督府の建物。

民主記念堂は、ようするに蒋介石
を讃える建物。豪華な専用車、巨大
な銅像などなど。





足裏マッサージ

第一日目には、現地の方のおすすめもあって、1時間全身マッサージ。パワフルな女性の体重をかけての施療。重さに耐えつつ。タイ式マッサージとはだいぶ異なる。無論、「やさしい？」日本式マッサージとはまったく異なる。

二日目は、ツアーの流れで、足裏マッサージをやらなくてはならない羽目に。ちょうどその時、沖縄の大きな病院のツアーもマッサージをうけていた。写真は、受けながら、私の足を写したものの。イギリスのレフレソロ

ジーに似ている感じ。相互の影響があるかどうかはわからない。

MRTにのって士林夜市へ

2日目、ツアーを終えて夕方、散策しながら、台北の電車（地下鉄に似ている）に乗る。鉄道のない沖縄だし、日本の交通システムとやや異なるので、乗るのに手間取る。

案内板に「往月台」とある。電車の行き先かと思っていたが、「月台」がプラットフォームであることが後でわかる。

わからない時、若者に仲間が日本語で尋ねたが、通じない。年齢が高い人だと、日本語が通じやすいが、若者には難しい。そこで、私が英語でたずねると、通じる。若者には英語のほうがいいのかも。漢字での掲示は、わかることが多いが、このようにわからない時も多い。

そして、夜市で有名な士林へ。大変なにぎわいだ。はぐれないように必死という感じ。土曜日の晩ということもあって、若者が多い。カップルも多い。

台湾では、夕食は、外食というのが結構多いのだそうだ。結局、夜市で食べるのは断念して、レストランで食



事をした。結構、高級レストランだったが、酒代も含めて一人あたり2000円ですむ。おいしい魚料理を味わった。ここは日本客があまりこなさそうで、日本語より英語のほうが通じた。

帰りは、レストランでタクシーをよんでもらう。タクシーがすごく安い。沖縄の1/3くらいの感じだ。

市場 大根餅 など

今回のツアー参加者は、農業関係者であるとともに、生活感あふれる方々だ。だから、旅行社が組んだスケジュール以外は、そんなところをまわる。3日目の午前、台北のとなりの蘆洲の市場周辺に行く。

まずは、一行の一人の親戚の案内者が予め連絡をいれてくださった

ところで、大根餅を買う。お餅のなかに大根がいてあるという。数十センチ四方の大きいもの。那覇空港にもどってから、参加者みんなで分ける。私もいただく。



その後は、大きな市場。野菜・果物・魚・肉・衣服その他。那覇の農連市場の雰囲気。私はぐるぐるまわるだけ。なにも買わない。一行は、いろいろと物色

果物・野菜などは買いたくなるが、持ち帰れないものばかりでとても残念だ。

ところで、この旅に、一行のみなさんは大きなスーツケースをもって参加。私だけが、小さなリュック一つ。最初は不思議に思った。しかし、一日一日たつと、合点。

みなさん、高価なものを買うのではない。生活感覚豊かな買物。土産物を買う。すぐにスーツケースは満杯。そして、買物袋にも一杯。私は、運ぶのを手伝う係。そんなみなさんに私もつられて、烏龍茶など多少は買うが、リュックがふくれる程度。

そのなかで、私の最高にいい買物は、茶器を買ったこと。案内してくれた方に相談したら、市場近辺の焼き物屋に、タクシーの運転手が案内してくれた。急須類と茶碗など、10個ぐらい買う。値段が合計1500円。同



じものを、ツアーで立ち寄った（立ち寄らなくてはならない）ところでの値段でいうと、6000円ほど。日本でいうと、1万円をはるかに越える価格。

小学校 テンポがよく元気

がいい台湾の人々

大根餅を買った店の向いの小学校。

この日は日曜日だが、PTA作業なのだろうか、付近の清掃がおこなわれていた。

台湾の人々は、テンポよく動く。道路を走る車もそうだ。速い。車間距離だけでなく、

車線も狭い。信号には、あと何秒で赤になるか、青になるかを示すものが結構ある。歩道の青信号の残り時間が少なくなると、信号の歩行者の足どりが早くなる。歩行者のスピードも早い。

店の対応も元気がいい。

ある意味、競争社会なのかもしれない。

市場のなかをスクーターがどんどん走る。私はこわごわ。スクーターの足元には、買った野菜などを置いてある。子どもをスクーターにのせて走る人も多い。日曜日のためなのかもしれない。

そんな元気のいいかたたちはとても若く見える。仲間が、台湾の人は若く見えるのだという。そうかもしれない。きびきびしているから、そう見えるのかもしれない。今回の旅は、台北周辺の都市地区だから、そう見えるのかもしれない。

今回の旅の印象は、私にはテンポが早すぎる。都市地域だったら、もう一度いきたいとは思わない。でも、田舎だったら、もっと違う印象だろうなあ、と思う。



ラーメン 蛙料理 サトウキビ

ジュースづくり

市場の後、街中の人気の店で早い昼食。これはラーメン。日本のラーメンとはまったく異なる。麺には、ふつうの麺のほかに、ビーフンの麺が入っている。味はまったくあっさり。

蛙料理も出てくる。

食べなかった人もいるが、私は食べる。まあまあ。



食事後、私は茶器を買いに行くが、その途中、さとうきびの皮をむいて、サトウキビジュースをつくるのに出会う。



道路をタクシーで走っていると、超でかい看板がある。看板というよりも、ビルの3階分をそのまま使っている。

大きな顔写真。タレントなどを使った映画宣伝かなと思うがそうではない。どうやら、議員選挙の宣伝のようだ。タレント写真のような雰囲気だ。

三叉路の正面の8階建てくらいのビル全体が、これらの写真なのだ。

三日間というが、大変というか、過剰に充実した日々だった。これだけのものは、私だったら、半月ぐらいかけてまわるといった感じのところを、駆け足というよりは、全速力でまわった感じだ。

それにしても、いろいろな発見に満ちた旅だった。

帰りの台北から那覇への飛行機は一時間でついた。とっても近いのだ。



清水仁編著『国立故宮博物院案内』を読む 中国歴代皇帝の宝物

(2009年3月24日)

台北ツアーの折、故宮博物院にも寄ったのだが、1時間足らずの時間を駆け足ツアーでまわったので、博物館好きの私にとって不満の至りであった。そこで、ショップでガイドブック、というか所蔵物の写真集を買って、帰宅後ながめてきた。

博物館にもいろいろあるが、ここのものは、歴代中国皇帝の宝物の陳列といってもいいだろう。宝物には、儀式用のもの、皇帝の権威を誇示するもの、皇帝の趣味をあらわすもの、といろいろだ。とにかく皇帝でなければ、製作させ所持することができないすぎまじいものばかりだ。象牙の一本彫で、大きさが異なる21個の球が、多層的に入ったものなどは、人間技の作品ではないと思うようなものである。

中国の美術史の一端を学ぶうえで、参考になったが、私が好きな博物館には入らない。でも、博物館にはこうしたものが結構ある。大英博物館なども、帝国時代にエジプトなどからかき集めてきたものが目玉商品の一つであり、同じような面をもっているといえるかもしれない。

近年の博物館には、新たなありようを追求しているものが多い。民俗系統を展示する博物館は、異なる角度からのアプローチともいえるだろう。でも、各地に類似のものが多くつくられ、「またか」の印象をぬぐいきれなくなっている。また、子どもの学習に焦点化した博物館も結構つくられている。カナダにいた時、そうした博物館が結構多かったのが印象的だった。日本にもどってみると、そうしたタイプが増えていることに気づいた。

なかなか工夫しており、訪問しがいがあるといえる博物館が増えることを期待したい。

バリ 2012年

友人訪問を兼ねたバリ短期旅行から帰る (2012年3月11日作成記事)

友人訪問が主目的の旅で、3月5日に出掛けたバリから9日無事にもどった。往復格安チケットだけ購入するつもりだったが、それだと8万円。パックだと7万円。双方とも、同じフライトスケジュールだから、ホテル付き、観光付きのパックの方が遥かに安い。

それに、真夜中到着出発なので、友人たちの世話をお願いしにくい。パックだとホテル送迎あり。ということで、パックを選択した。

他にも、私たちと同様に、パックを購入したが、現地ツアープランをキャンセルして行動している人もいた。

私たちは、滞在中の半分ほど組まれている現地ツアーに参加し、残り半分のフリータイムで、友人との時間、さらに、スパ・散歩・買い物などを楽しんだ。

飛行機は、香港経由で、沖縄・香港間が香港エクスプレス航空、香港・デンパサール間が香港航空だ。いずれも中国人観光客が圧倒的人数。沖縄からの人は20名ほどで、私たちと同じパックの人がほとんど。真夜中着・発がちょっと困るが、しかたがない。



写真はバロンダンス

宿泊は、バリの中心都市の一つのクタに接するレギアの海岸から200メートルほどのところ。海岸沿いは高級ホテルだが、私たちのホテルはスタンダードクラス。といっても、部屋は広く何も問題ない。台風がないためか、建築の構造強度は強くなさそう。音が結構響いてくる。窓を開けると、バイクの音が響いてくる。



上写真は、友人たちが子ども向けに開いているアート・スクールの建物。

左写真は、ゴア・ガジャ遺跡の大木



右写真は、タナロット寺院近くのインド洋に沈む太陽





上写真に写っているバロンは、沖縄でいうと、二人がかりの獅子舞だ。

音楽は有名なガムランだ。多様な楽器が不思議なリズム・メロディーをかもしだす。

バロン

3月5日の深夜に到着したが、翌日は朝から丸1日のツアーだ。親切なバリ人ガイドの案内。日本語を話せるベテランガイド。

最初に行った先は、バロンダンスを見せるところ。伝統的なヒンズーの物語で、バロン(良い魂を持つ動物)とランダ(悪い魂を持つ動物)との永遠の闘いを描くというものだ。



説明書にあるストーリーを予め読むが、進行につれてよく分からなくなる。でも、善側と悪側のからみ・闘いと言う感じは分かる。

コミカルな個所も多い。

踊りは相当にトレーニングされたものだ。女性はとくにそんな印象を受ける。



観客は、海外からの観光客がほとんど。

旅スタイル

今回の旅は、1995年のカナダ西部訪問以来久しぶりの個人型ツアー旅行だ。旅行社が組んだツアーではあるが、すべてがセットされた団体旅行ではなく、自分たちなりのアレンジが可能な形だ。

今回、沖縄から同じ飛行機で出発したのは、10数人だろうが、全員が集まって行動することは全くないので、何人か正確にはわからない。飛行機が一緒なので、多分そうだろうな、という推理だ。

デンパサール空港に着いて、数人を1組にして、ガイド一人がホテルまで連れていく段階で、私たちのグループは、3組7人であることがわかる。

同じホテルだったのは、他にもう1組4人、別のホテルに1組2人だけは、わかる。この10数人は、旅は道連れということで、飛行機の待ち時間などで話しがはずんだりした人が多い。全体としてみれば、わたしたちのような熟年層と若人層だが、女性が圧倒的に多い。偶然、恵美子の受講生もいた。バリ初訪問者がほとんどだったが、一人のビジネスの方だけは経験者だ。

私たちのツアーは、手ごろな値段なので、スタンダードクラスのホテル使用だが、夕食一回は、通常なら一泊5万はするリゾート型高級ホテルのビタマハでとる。

右写真は、ビタマハのレストランから下方の光景。自然のなかにスパがつくられていて、どこかの観光案内冊子で見たことがある。ここは、ウブド王家系統が経営しているとのこと。



バリは、文化・自然の魅力が中心だろうが、おもろ町や豊崎にあるのと同じ免税高級ブランド品を扱うDFSがあり、その2階で一度夕食をとる。しかし、私たちには縁がない所で、買い物もしなかったし、写真もとっていない。

買い物を主眼にツアーする人には好まれるだろう。ほかにも銀細工などの見学・買い物なども、一日ツアーには含まれている。でも「苦になる」ほどのこともない。どこの団体ツアーもこうしたものが織りこまれており、それが旅行業者に収益のかなりを占めるということは、沖縄でもあることだ。

私たちは一か所の、「民芸品」専門店で購入をしたが、それは後の「物語記事」で書くことにしよう。



写真は、バロンダンスで、猿とバロンとの掛け合いシーン。コミカルな雰囲気。

ゴアガジャ遺跡

11世紀の遺跡だそうだ。

右の写真は、遺跡の中心の洞窟の入り口

「神聖な場にふさわしく」ということで、サリーをまくことになった観光客がいる。



沖縄のガマを思い出させてくれる。

左の写真は、洞窟のなかに祀られている像

右の写真は、沐浴場跡



右の写真は、遺跡の周りの緑

バリ島は、文化の歴史的蓄積がすごいようだ。



バリの人々 お店での買い物

下の写真は、宿泊したレギアンのホテルの窓から東を見る。町なかだが、緑が一杯で落ち着く。



バリ在の親しい人といえば、以前からの知り合いカップルだけで、かれらにしてもジャワ島、カナダ出身なので、もともとのバリの人ではない。3～4日滞在のなか、元々のバリの人で知り合ったのはガイドだけだ。ガイド以外で会話を交わした人は、店の人ぐらいで、ちょっとした英会話ぐらいだ。

だから、バリの人について書けるほどではない。それでも、ちょっとした会話、そして街などでの見聞の印象を少しだけ書こう。

第一印象は、素朴・善良で親しみを感じる。激しい道路のラッシュ、バイクの喧騒にもいらだたない。あくせくしていないのだ。沖縄に通じるものを感じてしまう。

写真は、クロボカン市場前の夕方の通りで、バイクでいっぱいだ。



元々の地元の人が圧倒的に多いのだが、観光客でなく海外から来て今はバリに住んでいる感じの人も多い。バリに溶け込んでいる感じだ。そんな人には、バイクを活用している人が多そうだ。私たちの知人が住んでいるウブドでは、特にそんな印象をうけた。

観光客も含めて多そうなのは、オーストラリア人、欧米人、中国人、韓国人。ロシア人もいる。ここでロシア語に出会うとは想像できなかった。以前植民地支配をしていたのはオランダだが、その歴史を感じることは無きにひとしかった。

それにしても日本人がすごく多い。

街の土産物店では、値段交渉するのが普通らしい。その要領が分からない。価格を聞くと、一応値段をいいながら、「いくらなら買うか」と逆に尋ねられることが多い。一応、先方が最初に行った値段の半額をいうと、何度かのやり取りの後、6～7割ぐらいに落ち着くことが多かった。

若い店員は海外客とのやりとりに慣れているのが普通なので、値段交渉に工夫しなくては、と思うが、一軒の衣料品店だけは、ちょっと事情が異なった。観光客よりは地元客相手の仕事なのかな、と思った。その店のおばさんは、最初から私たちに妥当な価格を言い、交渉して下げるという「ふっかけ価格」ではなかった。

この店は、恵美子が気に入った「白い服」の専門店だった。センスがいいと私も思った。土産も含めて何着も買った。

ルピー、円、ドルの換算で頭がこんがらがり、そのおばさんは、ルピー支払いを希望して、近くの両替店まで連れて行ってくれた。そのおばさんとは、ちょっとした英語だが、用を足せる会話ができる。彼女には実直さを感じ、私も夏の上下を買った。

それにしても、日本のイメージでいうと、価格は3分の1くらいで安い。

こんな出会いが、旅の楽しさを加えてくれる。



キンタマーニ高原と棚田

バリ島は、小さな島だが、3000メートル級の高山があるとはびっくり。そのうちの一つの山と麓の湖を見渡す絶景の場所がキンタマーニ高原。そこで、昼食をいただく。

雨季なので、時々雨だし、霧がかかっていて残念だが、それでも美しい。

上の2枚の写真



高原の帰り道、棚田に立ち寄る。ガイドさんの実家があるとのこと。

ヤシの木に囲まれた棚田。美しい。

棚田は、東アジアに共通するものだろうか。

上と左の写真

暮らし・自然・宗教と結び

ついた文化

人々が暮らしている場には、宗教・自然と結びついた文化が満ちている。

当たり前のことだろうが、暮らしと文化が密着している。

宗教は、ヒンズー教であり、バロン、ランダ、ガネシュといった神々が至るところにいる。10数年前、ネパールで出会ったヒンズーと比べると、おっとりした雰囲気。熱帯の自然にマッチしているのだろうか。



上写真は、移動中にてであった村の行事の行列



踊りなども、神々の物語を表現する宗教的なものが多いのだろうか。2つしか鑑賞していないので、なんともいえないが。

沖縄もしばし前までは、そんな様子だったのだろうか、激変している。

左写真は、前に紹介したバロンの踊り

それでも、30年余り前に聞いた話だが、世界で民族音楽がいまなお人々の生活のなかで創造されているという意味で健在なのは、バリと沖縄とインドのどこかだということだ。

音楽や芸能に関心が深いかたには興味深いものばかりだろうな、と思う。

右写真は、ウブド王宮で見た踊りのガムラン奏者たち。

日本でガムラン演奏を聞いた時は、違和感に近いものを感じ、驚いたものだが、バリで聞くと何の違和感もなく、自然に聞こえてくる。周りの自然・文化のなかの音楽という感じだ。





ネカ美術館

ウブドにある個人運営の美術館。土地の雰囲気にとりあわせた建物の。

20世紀に入ってから、ヨーロッパから来た芸術家たちが、バリのなかで製作しはじめたものらしい。詳しくはわからないが、バリらしい作品になっている。

写真の彫刻群が素敵だ。
フラッシュをつけなければ、写真撮影OK。



中庭もなかなかいい。

自然と暮らし

バリには豊かな自然があり、全体として健在のようだ。しかし、急速な都市化、観光産業化は、自然破壊を進行させているかもしれない。短期滞在なので、よくはわからない。

それにしても、美しい景観を味わえた。

地図を見ると、赤道より少し南に位置するので、南半球と言うわけだ。私の初体験だ。真上からやや北寄りを太陽が通る理屈なのだが、雨季で曇り空が多く、北寄りの太陽を楽しむことがなかったのは残念だ。



夕陽は堪能した。沖縄と同じように美しい。



上写真は、タナロット寺院近くからの夕陽

海岸の波は荒いので、海水浴よりはサーフィン向けの印象

季節は、雨季と乾季の二つで、四季ではない。友人は、農家にとっては100も季節がある、という。水田をしばしば見たが、稲作は二期作ないしは三期作だとのこと。

滞在中の気温は、最低23度最高28度ぐらいで過ごしやすい。湿度は高いのだろうが、それほど感じない。朝、毎日のように大雨があった。昼時、川そばを通ると、水が濁っている。

植物は沖縄とほぼ同じだが、いずれも大きい。台風がないので、高木が多い。高さ数十メートルの木がよく見られる。ヤシが沖縄にくらべて多い。写真のように、サンダンカやクロトンなども大きい。



四つの高山があり、高いのは3000メートルクラス。火山が二つあり、地震もあるとのこと。写真は、南部のバドゥン半島の付け根あたりから見たバリ中北部。遠くに山がかすかに見える。



家は、木造が多く、コンクリートは少ない。都市ではスレート葺きが多いが、田舎に行くと茅葺も見られる。

左の写真は、ウブド王宮内の建物

たまたま同じツアーだった建築家が、バリの建築のおもしろさを語ってくれた。空港の売店でも建築の本を結構見かけた。

ウブド王宮と踊り

バリ島には、いくつもの王権があったようで、その一つがウブドにあり、王宮が現存している。今もその子孫が住んでいるという。日本でいえば、小さな大名と言った感じだろうか。



建物には彫刻が散りばめられるなど文化財的にすごいものがある。左の写真は、その一角の彫刻。

夜には、王宮広場で踊りが演じられる。

久しぶりの友人との出会いの都合で、少ししか見られなかったのは残念だった。





社会風景 宗教 市場 お金

人が住んでいるところは至る所に、宗教的なものが置かれる。写真にあるような花を飾った置物が、町でも村でも至る所に置かれる。きれいだが、やがてとんでいくことになる。

各家の門も、宗教的意味がありそうで、なかなか立派だ。下写真のように、各家の前に道路にむけて高く立てられた飾りも印象的だ。

以前は農業社会であったろうが、今や観光が中心位置を占めつつあるようだ。19世紀までは、8~9の小王国。20世紀前半は、オランダ統治下にあったとのことだが、痕跡は見つけにくい。

活気ある市場。那覇の平和通り奥の市場のようなものがあちこちにある感じだ。

左下写真はウブド市場 ここは、観光客目当ての土産物が多い。

右下写真はクロボカン市場 ここは住民向けだ。ガイドさんが、バナナのでんぷらを買って御馳走してくれた。

スーパーは少ないにしても、コンビニの多さには驚いた。都市にはあちこちにある。日本のコンビニと同じ名前のものが多いから、日本の資本がはいっているのだろうか。

田舎には、農村共同体の社会が強力に生きていそう。町では「近代的なもの」と「伝統的なもの」が同居している印象。

インターネット・スマートフォンも結構普及しているようだ。愛知県と同じ面積と人口とのことだ。物価は安い。衣料品・食品は、沖縄の半額以下だ。

ドルや円を使えるところも多い。100ルピーがおよそ1円で、価格には0が多くて、換算で混乱する。One hundredと言われると、実はOne hundred thousands のことで、十万ルピー、つまり1000円のことだが、これに慣れないうちにバリ旅は終わった。ルピーが足りない時に、ドルや円



をつぎ足したりするが、それで混乱してしまう。私は使わなかったが、カードも使えることが多いとのことだ。





友人たちのアートセンター「イエロー・ココ」

今回のバリ旅のきっかけは、私たちのトロント在住中に親しくなった、インドネシア人のスシアワンさんとカナダ人のスーザン・アレンさんカップルとお付き合いにある。

トロントで出会ったわけだが、彼らはその後、しばしトロントとインドネシアとの往復生活をしていた。そのころ、日本にもきたことがあり、スーシーさんが一週間ほど、愛知の我が家に滞在し、中京大学でもワークショップをしてもらった。その際、彼の「リレーお絵かき」技法を学び、私流の「リレーお絵かき」をつくった。

恵美子は、トロント在住中、スーザンさんのコミュニティセンターでの活動を手伝ったこともあった。

その彼らが、バリ島に焦点を合わせて活動を展開し、ついに昨年秋に、ウブド郊外に「Creative Arts Community Center Yellow Coco」を開設した。放課後の子ども対象に美術活動を展開し、教師たち向けのトレーニングもしているようだ。ウブドは、芸術家たちが世界各地から集まっているところで、多文化的でもある。そんなところで、美術の仕事ができるようになって、とてもよかったと思う。

その彼らの Yellow Coco を案内してもらった。

上の2枚の写真は、建物だ。民家を借用しているとのこと。

下写真2枚は、子どもたちの作品





イエロウ・ココは、建物のあるコミュニティ、ニュー・クニンの地名の英訳だ。このコミュニティとかかわって運営されている。このコミュニティでは多様な芸術家が活動している。それらが交流協同して創造的アートを生み出すという意味で、「創造の巣」とも名付けられている。



アート・コミュニティセンター 「イエロウ・ココ」の活動のなかの子ども向けプログラムの概要を紹介しよう。 6歳から12歳まで

月曜日	「アートを通して文化を越えた友情」	4時30分～5時30分
	「ホーム。スクーリングのためのドラマ」	2時～3時30分
火曜日	「オゴオゴ制作とパレード」	4時30分～5時30分
水曜日	「創造的エコアートのためのオープンスタジオ」	4時30分～5時30分
木曜日	「幼児むけ時間」	10時～10時30分
	「絵画クラス (マルチメディア)」	4時30分～5時30分
金曜日	「フラフープとドラム」	4時30分～5時30分

会費支払いが難しい子どもの会費は、余裕のある会員が負担。 関心のある方は、直接、連絡を取って下さい。
yellowcoco@rocketmail.com 使用言語はインドネシア語と英語

写真説明 上の2枚は、建物内から見る庭。 左下は、紙芝居の舞台。 右下は、作品の一つ





ステキな「レストラン」?

時期はずれなのか、客は私たちだけ。贅沢さがあふれる。しかも、建物はコンクリートではない。現地素材のようだ。ウブド郊外。

ベジタリアン・レストランだ。和食もあったが、ジャパニカでない米は、私たちにはなじみにくかった。



ここは、レストランだけでない。滞在型施設だ。友人はここでダンスワークショップを指導している。

中と下の2枚の写真は、その会場。広く高い。とてもステキな建物。癒しスポットだ。

池のまわりにステキなコテージが並ぶ。(上右写真)

この名前が思い出せないのが残念だ。



道路を通る村の行事

車移動中に、村の祭りに出会った。この日は満月だったので、満月の関係があるかもしれないと推理する。美しく飾った隊列だ。100人ぐらいだろうか。都市のなかでは、行列のために、道路の通行規制も行われていた。

ところで、写真を撮った時に乗っていた車は、友人が知り合いに依頼したものだが、時間単位でガイドもしてくれるようだ。日本の観光タクシーの何分の一かのとても安価で、使い勝手がいい。トヨタ車だ。バリでは、こうした車を活用するのも、いいアイデアのようだ。運転手さんの子どもが、友人のアート・センターに通っているようだ。





タマンアユタン寺院

1 7世紀にバリの小王国のための王寺として創建された、という広大で立派なものだ。

日本の仏教寺院とは趣が異なるが、熱帯の風土とハーモニーを醸して落ち着いた雰囲気だ。

1 番目の写真は、正面から見たところ。

2 番目は、建物群。観光客の中には入れず濠の外からみる。



3 番目は、日本だったら多宝塔と呼ぶような建物だろう。苔むした室生寺五重塔を思い出させる。

4番目は、多宝塔群



5番目は、寺院前の芝生広場

ビール「ビンタン」 日本料理

私はグルメでないので、バリ旅で飲食について書けることは少ない。

印象に残ったのは、ビンタンというピルスナービールが美味しかったこと。価格は日本と比べると猛烈に安い。

最後の晩は、ホテル近くの日本料理店にいった。当然ながら現地従業員の対応だが、初歩的だとしても、日本語で対応してくれる。

カリフォルニア巻きの流行以来、最近は〇〇巻きというものが多い。写真の右はそれだ。





タナロット寺院

16世紀建立の寺院。



タナロット寺院近くの公園から見る夕陽
この夕陽が、観光スポットになっている。これまでも
すでに挿絵写真にしてきた。

1時間ぐらいいたが、飽きがこない。



タナロット寺院の隣の寺院

こちらの方が、被写体としては美しいのではない
かと思う。

スパとエステの体験

他のツアー客が行ってよかったということだし、私たちも、最後の日に時間があつたので出かけた。

恵美子と二人で並んでマッサージというか、なんというか、よくはわからないが、いろいろとケアしてもらった。食事もついて約5時間。

私の人生で、多分最初で最後の体験だろう。

写真は正面から建物を見たもの。

ここは、日本人をターゲットにしているようで、店名も日本名だし、客も日本人が多いが、従業員は現地の方たち。



左の写真は、バリ南部にあるこの店から、北の方向を眺めたもの。

買物

上着

レギアンの大通りの実直なおばさんから買った白い上着。恵美子は姉妹たちにと何着も購入。お店の前にこれらがならべられていたが、清楚な印象が強い。



ザフンカバー

手の込んだ模様が縫いつけられている。

Tシャツ

バリ図案が美しい





サンダル

バリ生活必須のサンダルだが、沖縄でも使いがいがありそう。

木彫りの魔女ランダ

素晴らしい作品だ。日本では信じがたい価格。
魔女ランダについては、恵美子の「心の宇宙散策」
ブログ参照。



ストラップとキーホルダー

鳥笛 石鹸など

他に、アロマ 茶わん敷 など

